

終刊の辭

『敦煌寫本研究年報』はもと 2006 年 4 月から始まった京都大學人文科學研究所の「西陲發現中國中世寫本研究」共同研究班の成果を毎年度雑誌のかたちで公刊したのに始まる。人文研の研究班報告は通例五年なら五年の研究期間が終了したときに、一冊の「研究報告」として出版される通例であった。筆者もそれ以前に班長として組織した研究班では、期間終了後に報告論文集を二冊刊行した経験があった。それに對してこの新しい研究班では『年報』というかたちで年に一回の研究報告を行うことにした。主として研究成果の速報性を考えてのことであったが、一面では多少とも新機軸を打ち出し得たのではないかと考えている。「西陲發現中國中世寫本研究」は五年後の 2011 年には「中國中世寫本研究」と名稱を變更したが、『年報』はそのまま繼續して發行した。當初「西陲發現」と銘打ったのは、主として敦煌・トルファン寫本を對象としていたからだが、新たに日本に傳存する中國典籍の寫本が視野に入ってきたことによる研究範圍の擴大が背景にあったからである。筆者は 2014 年 3 月に人文研を退職したので、研究班の報告としての役割は終えることとなったが、折角雑誌の體裁をとって始めたことでもあり、科學研究費によって『年報』の公刊を繼續することにし、刊行主體としては研究班のかわりに中國中世寫本研究會という名目だけの團體をでっち上げることにした。2013 年～2018 年の五年間は筆者を研究代表者とする科研費、續く五年間は京大人間環境學研究科の道坂昭廣教授の科研費を用いて幸いに繼續して公刊することができた。さらに最終號となるこの第十八號は同じく京大人文科學研究所の永田知之氏の科研費による刊行であることを申し添えておきたい。兩氏は本『年報』の編集委員でもある。

十八年前の創刊時、ちょうどその頃勉強し始めた L^AT_EX を用いて本誌の版下を作成することにした。一つには印刷費の節約ということもあったが、何よりも多くの漢字や國際音聲字母 (IPA) などの各種記號が自由に使用できるという利點があった。もともと理系の研究者の使うものだったが、實際に試みて敦煌遺書のような多數の異體字使用を強いられる場面でも非常に有効だということが分かった。以來ずっと L^AT_EX で作成した PDF を印刷所に渡すという方式を踏襲してい

る。しかしながら、初めのうちは誰もが世話になる奥村先生の『美文書作成入門』だけでは、なかなか解決できない問題が頻出したのも事実である。幸い隣の研究室に安岡孝一氏が居たので、しばしば同氏のドアを叩いて教えてもらった。嫌な顔ひとつせず（と言いたいところだが、必ず毎回嫌な顔をしながら）懇切丁寧に教えてくれた。同氏は小生の TeX の先生であったばかりでなく、本誌にとって同氏の貢献はすこぶる大きかった。現在では OTF パッケージの出現で Adobe-Japan1 の漢字 23000 餘りの漢字が使える上に、グリフウィキ (GlyphWiki) ではさまざまな異體字字形が提供され、どうしても新たなグリフが必要な場合には kage-editor で自由な作字が可能である。最初のころに比べると編集作業は格段に便利となった。まことに隔世の感がある。

しかしながら年度末になるとどうしても編集作業が大変になる。他の仕事との兼ね合いもあって、時間配分にはなかなか苦勞が多い。或る時期から副主編の岩尾一史氏や大学院生の龔麗坤君に一部を手傳ってもらうことにしたが、それでも大部分は自分でやって來た。慣れた仕事なので、さして面倒ではないが、如何せん寄る年波には抗しがたく、細かな作業はすぐに眼が疲れてしまうようになってきた。數年前から切りの良い二十號までは何とか續けたいと思っていたが、今號で終刊を決意した。一旦終刊を考えてしまうと中々繼續する氣力を奮い起こすのは難しい。そこで昨年春に永田、岩尾の兩副主編の内諾を得たうえで編集委員會に諮って、この第十八號をもって終刊とすることに決定した。讀者及び關係諸子に對し、これまでのご支援に感謝すると共に、ご寛恕を賜りたいと思う。

本誌は日本唯一の敦煌學専門誌として一定の役割を果たしてきたと自負している。思えば一世紀を超える日本敦煌學の歴史において、敦煌を冠する専門誌の存在しなかったことは不思議である。是非とも日本發の新たな敦煌學研究雑誌の出現することを期待したい。

2024 年 3 月

高田時雄